

コロナ禍が開けた扉

石井 泰子

満九六歳で天寿を全うした私の母は、茨城県結城市と栃木県小山市一帯の特産品である結城紬の織り手として人生の大半を過ごした人であった。

材料となる絹糸は、祖母が真綿から紡ぎ出していた。その絹糸を染色する前に、水に漬かると消えてしまう特殊な墨で印を付けた部分だけを綿糸で縛り、染料が染み込まないようにして柄を作り出す『かすり紺くくり』という作業を父がやった後、こうや紺屋へ染めに出し、それを母が織り上げて紬問屋へ売り渡していた。

文字通りの家内工業であったため、物心ついたところから草木染と絹織物は常に身近な存在であった。

小学校高学年に進級したころの私は、四キロのデコボコ道を歩いて、紺屋までよくお

使いに行った。緋くくりが終った絹糸を届けたり、染め上がりを受け取るためである。

染料の甕の間を手際よく動き回って絹糸を染めている職人の手捌きを見るのが大好きだった私にとって、お使いは少しも苦にはならず、行くたびに軒先に佇んで飽かずに眺めていたものである。

この染色作業の光景は心の奥深くに刻み込まれたまま、祖母、父、母と順に送ったあと、いつの間にか忘れた。

二〇二〇年春、その記憶を呼び覚ます切っ掛けとなった異変が勃発した。勃発としか言いようのない新型コロナウイルス禍である。

マスクや消毒液の品切れと目を見張らんばかりの高騰、週に二回通っている卓球教室の閉鎖、ボランティアで参加している特別養護老人ホームでのハーモニカ演奏会の中止など、数えれば切りがない変化にどぎまぎしながら、一か月を過ごした。

あれも自粛、これも自粛で息も詰まりそうな日々の中、おおっぴらに外出して体を動かすことができるのは、八年前から続けている往復で五キロの早朝散歩だけとなった。

羽田空港を間近に臨む多摩川河口の街に住む私にとって、整備された土手と河川敷は、

恰好の散歩コースとなっている。

コロナ禍となるまでは、季節の移ろいを楽しむ程度で、家に戻れば趣味の教室やボランティア活動に飛び出して行くといった状態で、土手から何かを得ようなどという発想は全くなかった。

しかし、外出自粛でポカンと空いた時間を有意義に過ごす方法はないものかと思案しながら散歩している私の目に、土手の法面に繁茂している楮しこうぞの若木が飛び込んできた。

外皮の繊維が和紙の原材料になるクワ科の植物である。

それを見た瞬間、何の前触れもなく遠い昔に見た紺屋の光景が蘇り、思わず呟いた。

「この外皮を煮出して草木染ができないかしら。廃業した呉服屋さんから貰った古い羽二重が何反もあるから試してみようかな。黄ばんでいてあのままじゃ使い物にならないんだから駄目元でやってみよう」

思い立ったら待て暫しのない性格の私は、家に取って返し、パソコンを開いて草木染についての情報を掻き集めた。

プロの職人の草木染は、紺屋の軒先でじっくり見てはいたが、自分では染液に触った

こともなかったし、染色についての科学的な知識も皆無であった。

まず、染料を生地に固着させるために必要な媒染剤を作るところからやらねばならぬ。
い。

家庭で手軽にできる草木染の媒染剤は、錆びた釘を酢水に漬けて作る『鉄媒染剤』。

銅線を酢に漬けてから天日干しして緑青を吹かせた後、酢水に漬ける『銅媒染剤』。

銅媒染剤は銅線が家に無かったため、ちよつと罰当りかなと気にしながら、十円玉三十個ほどで代用した。酢水に漬けた十円玉はピカピカに光り、化学実験さながらである。

どちらの媒染剤も、漬けてから一週間ほど使うことが分かった。

その他に、『アルミ媒染剤』があるが、これはスーパ－の漬物売場に置いてある焼きミヨウパンを買ってきて、お湯で溶かして使えばいいので簡単だ。

どの媒染剤も、水道に流しても害がないということを知って安心する。

媒染剤が完成したところで、小さな鎌を買って楮の生えている場所に自転車で出かけた。

一抱えほどの楮の外皮を剥ぐ作業は、衝撃的であった。露の皮を剥く要領で茶褐色の分厚い外皮を根本から引き上げると、ヒューッと先端まで一気に剥けて、中から真っ白な木肌が現れた。その色彩の落差に驚くと同時に、この白い枝物は花材になるなど嬉しくなった。

その上、ヒューッとやるたびに溜まったモヤモヤが消えて行くような快感が走るのがある。

楮の外皮剥きは、ストレス解消という思いも寄らなかった副産物もあることを実感した。

減多に出番のない特大のステンレス鍋を引っ張り出し、三十分ほどかけて煮出した楮の染液は出涸らしのお茶みたいな色で、「エーツ、こんな色なの」とがっかりして、勝手に膨らませていた期待感が一気に萎んだ。

しかし、乗りかかった船だから仕方がない。気持ちを立て直して、水に浸しておいた羽二重を煮沸した後、アルミ媒染してみる。

羽二重は、媒染剤に浸すと徐々に色が変って行き、蒸かしたてのさつま芋に似た綺麗

な黄色に染め上がった。匂いもさつま芋そっくりで、元々の黄ばみもすっかり消えている。

これならば、ブラウスにでも仕立てれば、外出着として十分通用しそうだ。

この瞬間、草木染という自然を相手にする未知の世界の扉が、ギギーッと開く音を聞いたような気がした。

それからの私は草木染の虜になり、土手に自生している植物で、染料になりそうなものを片っ端から採ってきて試してみた。

子供のころ、ひつつき虫と呼んで、黄色い花穂を友達の洋服に投げつけて遊んでいた、正式名称せんだんくさ梅檀草は、アルミ媒染で鮮やかなオレンジ色に発色した。

多摩川の水辺に生えている胡桃の葉の染液は銅媒染で、着古した白のカシミヤセーターを、こっくりした茶色に蘇生させた。

草木染には正解も不正解もなく、出て来た色を受け止めて、その色が気に入ればそのまま使い、気に染まなければまた別の染液で染め直してみるという自由さがある。

その自由さが私の大雑把な性格と相まって、無我夢中になっている内に夏が過ぎ冬が

来て、土手の植物は枯れ果てて材料は全く手に入らなくなった。

そして二〇二一年の年が明けた。

そのころには、私の草木染熱も平熱になり、母が織っていた結城紬の紺屋の光景に思いが戻って行った。

「あの紺屋が使っていた草木染の材料は何だったんだだろうか？ 藍と茜くらいは何となく知っていたけど、他のものは全く知らないな」

俄然興味の湧いた私は、頼みのパソコンを開いてみる。すると『やしゃぶし矢車附子』という聞き慣れない木の名前が出てきた。松ぼっくりに似た実を付け、昔の女性のお歯黒の材料になったことから、『お歯黒の木』とも言うとある。

実を煮出した染料で生地を染め重ねていくと黒になり、その黒を常陸水戸藩の第二代藩主徳川光圀公が愛用したことから、『水戸黒』と呼ばれるとも書いてある。

何とも遠大な話になってきたが、知ってしまったからには、その水戸黒を見てみたい気持ちむくむくと膨らんできた。

実の画像を見ると、どこかで見た記憶があるがそれがどこであったか思い出せない。

実家の裏手にあった雑木林で見たのか？ いや、そんな遠い昔のことではない気もするが……。

思案の挙句、区の土木課に問合せてみる。

「管轄内の樹木の管理台帳を調べてみますから、少し時間をください」

という応対の三日後、済まなそうな男性の声で電話が掛かってきた。

「残念ながら、管轄内には矢車附子の登録はありませんでした。もしかしたら、少し離れた地区にはあるかもしれませんが、こちらではお調べすることができません。お力になれなくて申し訳ありません」

申し訳ないのは、こちらの方である。

しかし、諦めることができなくてうずうずしているところへ、東京生まれ東京育ちの従弟がひよっこり顔を見せた。

知っているはずがないと高を括りながら画像を見せると、意外な答が返ってきた。

「ああ、この実。名前は知らないけど郊外に行くといくらでもあるよ。そういうことは車で走り回って仕事をしている俺に聞いてよ。でも、何でこの実が欲しいの？」

簡単に経緯を話した。従弟はふーんと上目遣いで私を見てから、茶化した声で言った。「相変らず、物好きの上にじっとしていられない人だね。でもさ。コロナ鬱になる人とか、顔突き合わせる時間が増えて、喧嘩が始まる夫婦もあるから、外出自粛のせいで草木染に目覚めたのは拾い物だね。コロナにも少しは取得があるんだね。しかし、転んでもただでは起きないというのは、あんたみたいな人のことを言うんだね」

私は、「はいはい。何とでも言つてよ。自然の猛威は、自然の力を借りて乗り切ろうと思つているんだから」と、言い返したいところをぐっと我慢して、

「実が生るのは十一月頃だから、ついでの時に車で採りに連れてつてよ。それまでは去年染めた生地で、ワンピースとかブラウスを縫つてステイホームを楽しんでいるから」と、下手に出て車を出してもらおう約束を取り付けてから送り出した。

矢車附子が実るころ、草木染の扉を開けてくれた新型コロナウイルス禍はどうなっているだろうか。

収束を祈りながら、呼び名も床しい水戸黒に思いを馳せている。